

# 引き戻しについて

著者

2023 年 7 月 27 日

概要

引き戻しの圏論的な基礎です。

## 1 引き戻しの定義

集合  $X, Y, Z$  と写像  $f: X \rightarrow Z, g: Y \rightarrow Z$  に対して、集合

$$X_f \times_g Y = \{ (x, y) \in X \times Y \mid f(x) = g(y) \}$$

と自然な射影  $\pi_f: X_f \times_g Y \rightarrow X, \pi_g: X_f \times_g Y \rightarrow Y$  の組  $(X_f \times_g Y, \pi_f, \pi_g)$  の組を、 $f, g$  の引き戻しという。このとき、図式

$$\begin{array}{ccc} X_f \times_g Y & \xrightarrow{\pi_g} & Y \\ \pi_f \downarrow & & \downarrow g \\ X & \xrightarrow{f} & Z \end{array}$$

が可換になる。

引き戻しは、この可換図式によって一般の圏に対して定義される。

**定義 1.1**  $\mathcal{C}$  を圏とする。2 つの射  $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Z), g \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, Z)$  に対して、極限  $(L = \text{Lim}(X \xrightarrow{f} Z \xleftarrow{g} Y), \pi_f, \pi_g)$  を  $f, g$  の  $\mathcal{C}$  における引き戻しという。つまり、図式

$$\begin{array}{ccc} L & \xrightarrow{\pi_g} & Y \\ \pi_f \downarrow & & \downarrow g \\ X & \xrightarrow{f} & Z \end{array}$$

を可換にし、特に普遍性を持つものを  $f, g$  の引き戻しという。

□

組  $(P, p, q)$  が  $f, g$  の引き戻しであることを, 可換図式において

$$\begin{array}{ccc} P & \xrightarrow{q} & Y \\ p \downarrow & \text{PB} & \downarrow g \\ X & \xrightarrow{f} & Z \end{array}, \quad \begin{array}{ccc} P & \xrightarrow{q} & Y \\ p \downarrow & \square & \downarrow g \\ X & \xrightarrow{f} & Z \end{array}$$

などと表す.

圏  $\mathcal{C}$  に直積とイコライザーが存在すれば, 引き戻しが構成できる. ここで,  $f, g \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$  のイコライザー  $(E, \pi: E \rightarrow X)$  とは,  $f\pi = g\pi$  を満たすもののうち, 普遍性を持つものをいう.

**命題 1.1**  $\mathcal{C}$  を圏とする.  $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Z)$ ,  $g \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, Z)$  に対して,  $X, Y$  の直積  $(X \times Y, p_X, p_Y)$  と  $X \xrightarrow{fp_X} Z$  のイコライザー  $(E, \pi)$  が存在するとする. このとき,  $(E, p_X\pi, p_Y\pi)$  は  $f, g$  の引き戻しである.  $\square$

**証明** イコライザーの定義より  $f(\pi p_X) = g(\pi p_Y)$  が成り立つので, 図式

$$\begin{array}{ccc} E & \xrightarrow{p_Y\pi} & Y \\ p_X\pi \downarrow & & \downarrow g \\ X & \xrightarrow{f} & Z \end{array}$$

は可換になる. よって,  $(E, p_X\pi, p_Y\pi)$  が普遍性を持つことを示せばよい.

任意に対象  $D \in \mathcal{C}$  と射  $\rho_X \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(D, X)$ ,  $\rho_Y \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(D, Y)$  を取り,  $f\rho_X = g\rho_Y$  だと仮定する. このとき, 直積の普遍性から, ただ一つの  $p \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(D, X \times Y)$  が存在して,  $\rho_X = p_X p$ ,  $\rho_Y = p_Y p$  が成り立つ. さらに,  $(fp_X)p = f\rho_X = g\rho_Y = (gp_Y)p$  が成り立つから, イコライザーの普遍性より, ただ一つの  $e \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(D, E)$  が存在して,  $p = \pi e$  が成り立つ. 以上より, 可換図式

$$\begin{array}{ccccc} D & & & & \\ & \searrow e & & \searrow \rho_Y & \\ & E & \xrightarrow{\pi} & X \times Y & \xrightarrow{p_Y} Y \\ & & \searrow p & \searrow p_X & \downarrow p_X \\ & & & X & \xrightarrow{f} Z \end{array}$$

を得る. したがって, 可換図式

$$\begin{array}{ccc} D & \xrightarrow{\rho_Y} & Y \\ e \searrow & & \downarrow g \\ E & \xrightarrow{p_Y\pi} & Y \\ p_X\pi \downarrow & & \downarrow g \\ X & \xrightarrow{f} & Z \end{array}$$

を得るから、 $(E, \pi p_X, \pi p_Y)$  は普遍性を持つ。 ■

一般論から、引き戻しは存在すれば同型を除いて一意に存在する。

## 2 引き戻しの例

**例 2.1**  $\mathcal{C}$  を圏、 $T \in \mathcal{C}$  を終対象とする。任意の対象  $C \in \mathcal{C}$  に対して、ただ一つ存在する  $\mathcal{C}$  の射  $C \rightarrow T$  を  $!_C$  で表す。このとき、任意の対象  $X, Y \in \mathcal{C}$  に対して、 $!_X, !_Y$  の引き戻しは、 $X, Y$  の直積となる。

実際、 $(X \times Y, \text{id}_{X \times Y})$  は  $X \times Y \xrightarrow[!_{X \times Y}]{!_{X \times Y}} T$  のイコライザーを与えている。よって、 $(X \times Y, p_X, p_Y)$  は引き戻しである。

**例 2.2** 集合の圏 **Set** における引き戻しは、冒頭に述べた  $(X_f \times_g Y, \pi_f, \pi_g)$  である。

**例 2.3**  $G$  を有限群とする。有限  $G$  集合の圏において、図式  $G/H \xrightarrow{f} G/L \xleftarrow{g} G/K$  の引き戻しは

$$\bigsqcup_{HxK \in H \backslash aLb^{-1}/K} G/(H \cap {}^x K), \quad \pi_f: yH \cap {}^x K \mapsto yH, \quad \pi_G: yH \cap {}^x K \mapsto yx^{-1}K$$

で与えられる。ただし、 $f(H) = aL$ ,  $g(K) = bL$  である。

## 参考文献

[1] 中岡宏之. 『圏論の技法』. 日本評論社, 2016.